



執筆者

堀 成美

ほり なるみ

看護師・感染対策ラボ 代表

神奈川大学法学部、東京女子医科大学看護短期大学卒業。2009年国立感染症研究所実地疫学専門家コース（FETP）修了。同年聖路加国際大学助教、2013年より国立国際医療研究センター感染症対策専門職。2015年より国際診療部医療コーディネーター併任。2020年8月より現職。

自分や周囲だけでも守りたい (それを皆でやればいい)

2024～2025年度は百日咳が大流行しています。日本だけでなくアジアでもヨーロッパでも多くの人が感染し、そして各国で生まれて間もない赤ちゃんが犠牲になっています。今、このページをお読みの方で妊婦さん、そのパートナーや同居家族、妊婦や赤ちゃんに接する仕事の人には百日咳ワクチンの追加接種をおすすめします。周囲にそのような人がいる方は、ぜひかかりつけや予防接種に詳しい医師・スタッフのいる医療機関でご相談ください（表1）。

◆ ◆ ◆

百日咳は、その名の通り長期間続く咳の症状が特徴です。日本での課題は2つあります。1点目は予防のためのワクチンのプログラムが整っていないこと。乳幼児期に接種をした後に、効果が下がってくる頃に追加接種をする必要があるのですが（表2）、日本では思春期の定期予防接種として位置づけられていません。任意接種（自己負担ありのワクチン）です。このため、「本当は接種した方がいい」ことを知らない人・保護者の方が多く、また接種した方がいいと気づいたとして、自費での接種としたらどれくらいの人々が接種をするでしょうか。

図は東京都で報告された百日咳症例の年齢の特徴です。10～19歳は行動も活発で、移動範囲も広いいため、地域での感染拡大のハブになっています。このような状況になることは想定されていたことです。それでも対策は進まず、小さな赤ちゃんの命が奪われている状況があります。国や自治体の動きは遅いですが、待っているのは守れない命があります。

2点目は、「耐性菌」の問題。治療が難しくなっていることです。適切な抗菌薬の治療を行えば菌そのものを短期に殺すことができますが、菌を殺せたとしても、ダメージを受けた細胞が完全に回復するまでに時間がかかるため、咳の症状が長く続きます。ダメージの大きさに驚

きます。そして、この感染症が広がるのは誰かの咳やくしゃみからです。耐性菌そのものについて私たちができることはありません。残された努力は「咳・くしゃみ症状のコントロール」です。出る時は出る。止めることはできません。このため、マスクをしても人のいない方を向く、間に合わない工夫を続けていきましよう。

大流行した後、しばらくは落ち着くでしょう。しかしまた数年後同じことが起こるかもしれません。その時は今より対策が進み、百日咳で赤ちゃんが一人も死なない社会をつくりましよう。

表1 妊娠中のワクチン接種で
赤ちゃんがかかりにくくなるVPD*

ポイント	予防・ワクチン
<ul style="list-style-type: none"> ・百日咳に対する免疫力が低下して、小学生～大人の百日咳が増加。 ・乳児がかかる命に関わるため、周りの者がうつさないようにワクチンを接種。 ・出生後の赤ちゃんの予防のために、欧米では妊婦が成人用ワクチンを受ける。 	三種混合ワクチン1回 （日本では成人用三種混合ワクチンTdapは承認されていない） ※乳幼児は四種混合ワクチン4回定期接種

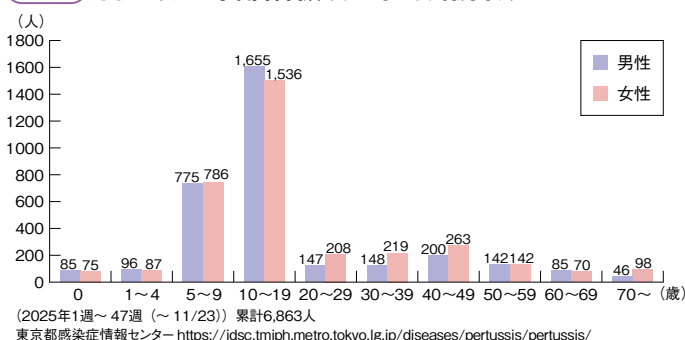
NPO法人 VPDを知って、子どもを守ろうの会「オトナのVPD：子育て世代のワクチンで防げる病気」（<https://otona.know-vpd.jp/kosodate.html>）より、百日咳に関する項目を抜粋

表2 予防接種の免疫力が弱くなっているVPD*

ポイント	予防・ワクチン
<ul style="list-style-type: none"> ・百日咳に対する免疫力が低下して、小学生～大人の百日咳が増加。 ・乳児がかかる命に関わるため、周りの者がうつさないことが重要。 ・周囲に妊婦や低月齢の乳児がいる人は、三種混合ワクチンの接種がおすすめ。 	三種混合ワクチン3回 【追加接種（3回接種者）】 三種混合ワクチン1回

NPO法人 VPDを知って、子どもを守ろうの会「オトナのVPD：思春期・青年期のワクチンで防げる病気」（<https://otona.know-vpd.jp/seinen.html>）より、百日咳に関する項目を抜粋

図 百日咳の年齢階級別・性別報告数(東京都)



*VPD (Vaccine Preventable Diseases) とは、「ワクチンで防ぐことができる病気」のこと